集会アピール

７月２７日、２８日に静岡県伊東温泉で開催された２０１９年度全国寄宿舎学習交流集会は、全国各地から約１００名の参加を得て成功をおさめました。全国の仲間と寝食を共にするスタイルの開催は久しぶりとなり、夜遅くまで寄宿舎のこと、子どもたちのことを語り合うことができました。また、本集会は「第一回寮母大会（１９６０年）」から数えて６０回の節目の開催でもありました。集会を準備してきた、全教障害児教育部寄宿舎事務局のみなさん、神奈川、埼玉、東京の実行委員会のみなさん、１年にわたって企画・準備に携わったみなさまに、心より感謝の意を表するものです。

先の参議院議員選挙では、改憲勢力が多数を占めました。しかし、憲法改正発議のできる３分の２の議席は何とか奪われずにすみました。集会のあいさつや基調報告でもあった通り、私たちの平和・憲法は脅かされています。障害児者をめぐる厳しい状況を改善するためにも、政治、情勢をしっかり学びながら、憲法を守りいかす運動をすすめていきましょう。

改訂学習指導要領では、国や財界の求める人材像に即した「資質・能力」を求める教育が示されました。競争教育や管理教育が推しすすめられ、子どもたちも寄宿舎に疲れ果てて下校してくるようになっています。子どもたちの発達保障という点では、寄宿舎の実践がより重要なものになっています。集会記念ソングに込められた「失敗してもいいんだよ」「寄宿舎はにばんめのおうち」という歌詞に表れているように、子どもたちが主人公となる寄宿舎教育を進めていきましょう。子どもたちの成長や悩みに寄り添い、すこやかな人格の形成をすすめる、そんな寄宿舎をつくっていきましょう。

さて、本集会では、佐藤比呂二さんによる記念講演「子どもの願いに寄り添うとは」では、佐藤先生の実践をとおして、子どものありのままの姿を受けとめ、そこから本当の願いをとらえていく大切な視点を学びました。「知っとく講座」は４つの講座で、各専門分野の方から、明日からの寄宿舎教育に生かすヒントを学びました。「実践分科会」では、１０都道府県から１６本のレポート発表がありました。ベテランから若手の寄宿舎指導員まで、幅広い年齢の指導員がレポートをもって参加し、どの分科会も白熱した議論が交わされました。舎生の障害の重度・多様化がすすむなか、「子どもの内面をとらえる」「共感すること」の大切さや、「寄宿舎での豊かな活動」「生活を通して培われる力」「仲間の中でこそ育つ」「連携と共同」など寄宿舎教育の価値を幅広く再確認することができました。

今年は１９７９年の養護学校義務制実施から４０年を迎えました。障害のある人もない人も、たがいに人格と個性、多様な生き方を認めて支え合い、学び合い、人を大切にする社会の実現を求めていかなければなりません。私たち障害児教育に携わる仲間は、立場の弱い人たちの気持ちに寄り添いながら、誰もが平和で安心して暮らせる世の中をめざしていきましょう。

「自助、共助」を強調した国の公的責任の放棄、貧困と格差の拡大、弱者が切り捨てられる政治に、かつてない怒りが国民の中に広がっています。最大の被害者は、一番弱い立場にある子どもであり、障害のある子どもたちです。財政や効率を最優先に推しすすめる国の政策ではなく、すべての子どもたちや国民を大切にする社会の実現をめざしましょう。また、あらたな寄宿舎教育の１歩が踏み出せるよう、これからのも運動交流、実践交流をすすめていきましょう。

２０２１年の夏により多くの参加者でお会いしましょう。

２０１９年7月２８日　　２０１９　第６０回全国寄宿舎学習交流集会 in 伊東温泉